

## 幼児期における基本的情緒形成とその障害に関する研究

主任研究者 清水 凡生(呉大学看護学部)

研究要旨 出産後赤ちゃんに対して愛着を深める動機は初めて抱っこした時であり、母親としての実感は授乳によって強くなることが明らかになった。新生児期に母親から『活発』な性格とされた乳児は、睡眠・覚醒リズムが安定しており、授乳場面での相互作用も良好であった。

育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。

母親の受容的態度は子どもの自己主張能力を高め、誘導的育児スタイルは自己制御能力を高める傾向がある。また、統制的態度や力中心の育児スタイルは子どもの自己抑制機能の発達を阻害する。母親の力中心の育児スタイルは自己主張だけが強く自己抑制能力の低い子どもを育てる。

思いやりや正義感の発達は同性の親子の間での一体感の形成を促すが、異性間ではかえって抑制される。また、親の自己制御のしつけは同性の親子の間でなされた場合は、思いやりや正義感の発達を促すが、異性間ではかえって抑制される。親の子どもへの介入には性役割を考慮する必要がある。

幼児をもつ母親の母親役割受容には、家族とのかかわり方、特に夫との関係が重要な意味をもっていること、母親役割を受容し、積極的に育児に関与していくためには、夫が妻の育児に関心を示し、心理的にサポートしていくことが重要であることが示唆された。

産婦人科病院、保育所、乳児園でチェックリストを使用し、リスク事例をピックアップし、一次介入を乳幼児精神保健学の専門家の指導の下で現場の職員が行い、二次介入を現場で、現場の職員の協力の下で専門家が行った。その結果良好な親子関係が育成された。

分担研究者 大日向雅美（恵泉女学園大学人文学部教授）、森下正康（和歌山大学教育学部教授）、首藤俊元（埼玉大学教育学部助教授）、岡本祐子（広島大学教育学部助教授）、澤田敬（高知県立西南病院小児科部長）  
研究協力者 竹中和子（広島県立保健福祉短期大学講師）、下見千恵（広島県立保健福祉短期大学助手）、片山美香（呉大学看護学部講師）

### はじめに

本研究は乳児期から幼児期におよぶ発達を視野におき、心の健全育成に資する成果を得るための研究として企画したものである。そのために心の発達に関係する保護者、幼稚園・保育園の保育者などによってもたらされる諸要因の分析を年齢の経過にしたがって行い、それらの子どもへの影響を具体的に、縦断的に検討しながら育児、保育における心の健康作りのための施策を明らかにしようとするものである。

### 情緒形成の基礎的研究

乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する要因を検討しようとしたものである。そのために健康な新生児とその母親を対象に看護者による新生児行動特徴評価、授乳場面における相互作用評価と、退院前の母親に対して、出産体験に伴う感想、現在の心身の状態、対児感情や認知、そして育児意識や姿勢についての質問紙調査を行った。気質的行動特徴は新生児期において、すでに母親によって認知されており、看護者による評価と相関するものが多かった。しかし、育児姿勢や育児意識は新生児期、乳児期前期には未だ明確でなく後期に至ってはじめて個々の特徴が示されるようになった。したがって、新生児の気質と育児姿勢の関係は今後の経過に待つところが多いが、現在までの資料で認められるところを示すことにした。

質問紙調査から、出産後赤ちゃんに対して愛着を深める動機は初めて抱っこした時であ

り、母親としての実感は授乳によって強くなることが明らかになった。

乳児の行動特徴と母親による気質認知および育児意識との関連については、新生児期より乳児は個性的で、母親はそれぞれに受け止め、一貫してはいないが親としての思いをもって乳児に関わっていた。また、母親の気質認知や育児意識は乳児の成長・発達に伴い少しずつ明確化していた。

新生児期に母親から『活発』な性格とされた乳児は、睡眠・覚醒リズムが安定しており、授乳場面での相互作用も良好であった。また、乳児期前期で、『活発』な性格とした母親は、新生児期から乳児が泣き止みにくかったがよく働きかけていて、より肯定的にとらえているようである。

将来への思いで、乳児期前期に単に『元気で』さえあればよいとした母親は新生児期乳児への働きかけが少なく、乳児は活気が乏しく泣き易かった。子どもは自然に育っていくといった育児観が背景にあることが予測され、育児への積極的係わりが欠如していた。一方、新生児期に『心優しく』と願った母親は、乳児の反応性は低かったがよく働きかけていた。

#### 育児ストレスに関する父母間の比較研究

自己の感情を言葉で十分に伝達できない乳幼児に対しては、養育者がその表情から乳幼児の感情を的確に判断して対応する能力が求められる。通常は乳幼児の感情認知は母親に適性があると考えられているが、一方、父親の感情認知能力との間にどのような差異があるのだろうか。さらには、養育者側が抱えている育児ストレス等の要因は、乳幼児の感情認知にどのような影響を及ぼすのか。

育児能力に関する父母間の比較を行う研究の一環として、乳幼児の感情を把握する能力に焦点を当てて父母間の相違を検討すると共に、その背景要因の一つとして、養育者としての育児感情がどのように影響しているかを明らかにしようとした。

育児感情、および乳児の表情から感情を把握する能力について、父母間の比較を行った結果、必ずしも明確な性差は認められなかった。一部の項目で、母親の方が子どもとの共有経験をより強く示す傾向が認められ、他

方、父親では分離経験を示す傾向が得られている。しかし、他の大部分の項目では父母ともに同様の傾向が示されていて、有意差はない。同様に、育児における充実感あるいは苛立ちや不安を尋ねた項目でも、父母の回答は傾向として類似性が高い。しかしながら、「できることなら育児は妻に任せたい」「子どもと気が合わないと感じることもある」等、育児からの距離感を大きくする回答も父親に顕著にみられた点である。

このように、育児感情の面では、一部に父母間の差異が示されてはいたものの、乳児の感情認知では殆ど性差が認められていない。むしろ、育児に不安や苛立ちの強い場合、父母ともに、乳児の感情認知にやや意図的かつ否定的な要素が込められている傾向が認められた。本研究は、乳児の感情検査と育児感情との関連性を検討しようとしたパイロットスタディであり、今後は調査対象をさらに広く求めて、分析を深めていく。

#### 幼児期の自己制御機能の発達

幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さらに親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児の母親とクラスの担任教師に対して、子どもについて評定を求め分析した。

自己制御（自己抑制と自己主張）・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群

の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い群の攻撃性が高かった。

また、園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

#### 思いやりと正義感の発達を規定する家族要因の研究

幼稚園における幼児の自己制御機能について、思いやりおよび攻撃性との関係、さらに親子関係が自己制御機能の発達にどのような影響を与えるかについて検討した。そのために幼稚園児の母親とクラスの担任教師に対して、子どもについて評定を求め分析した。

自己制御（自己抑制と自己主張）・思いやり・攻撃性尺度に関して、家庭での母親評定と園での担任評定との相関は全体に低い値であった。また二人の教師による評定間の一致度も低かった。

担任評定による園での子どもの自己抑制の発達に関して、男子では年中から年長にかけての発達が著しく、女子では年齢の上昇と共に発達していた。自己主張の発達に関しては、男子では年齢による変化がないのに対して、女子では年少から年中にかけて発達が見られた。

思いやりについて、年中児では、男子は自己抑制の高い群の方が得点が高いが、女子には有意差はなかった。年長児では、男女共に自己抑制も自己主張も共に高い群の得点が高かった。

攻撃性について、年中児では男子は自己抑制の低い群の方が、女子は自己主張の高い群の方が攻撃性が高かった。年長児では、男子の場合は自己主張が高く自己抑制の低い群の攻撃性が高く、女子の場合は自己抑制の低い

群の攻撃性が高かった。

また、園での自己制御について、年中児の場合、母親の受容的態度が男子の自己主張を育て、母親の誘導スタイルが女子の自己制御能力全体を育てる可能性があった。それに対して、年長児の場合、母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また、女子に対しては、母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め、さらに、母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性がある。以上の結果は、親子関係と家庭での子どもの特徴との関連とは異なった結果であった。

#### 育児期の母親の母親役割割り受容と家族関係に関する研究

育児による親の発達を支える家族要因について、心理学的な視点から分析したものである。本研究の結果をまとめると、次のような点が示唆された。

全体的にみると、父親よりも、日々、直接、育児に関わることの多い母親の方が、親の発達感には有意に高かった。これは、先行研究を支持する結果であった。

しかしながら、母親の職業の有無によって、親の発達感に影響を与える要因には、相違が認められた。母親が無職の家庭では、父親の家事・育児参加が、母親が有職の家庭では、夫婦の調和性が、親の成長・発達感に影響する重要な要因であることが示唆された。また、母親の職業観も、母親本人のみならず父親の発達感にも影響を及ぼすことが示された。

少子高齢社会を迎えた我が国では、結婚・出産後も子育てと職業を両立しようとする傾向は、今後、ますます増大していくことであろう。しかしながら、よりよい子育てを実現していくためには、親の側も育児に積極的に関与し、自らにとっても育児の意義を実感できる体験が不可欠である。本研究の結果より、以下の点が示唆された。

まず、夫婦で子育てを行うことの重要性である。これは昨年度の研究からも示唆されたことであるが、母親だけでなく、父親も主体的・積極的に子育てに関わることが、子育ての否定的意識を軽減するのみでなく、父親・母親自らの発達につながるのである。

また、母親の職業観、つまり職業に就く理

由、就かない理由は、職業の有無以上に、親としての発達にとって重要な要因であることが示された。職業に就くこと・就かないことをいかに主体的に選び取り、その意義を積極的に認められるかが、母親本人のみならず、夫の父親としての発達感にも影響を及ぼすのである。ライフサイクルの中に占める育児期の比率が相対的に減少した今日、夫も妻も子育てと職業を自らの人生の中にどのように組み込み、両立させていくかが、重要な課題であると考えられる。

#### 乳幼児期の情緒形成不全の早期発見方法の研究

子供は心温かい父母の下で育てられると、豊かな情緒の形成が保証される。しかし全ての父母は、毎日のように子供からかき回され、子育て混乱を起こしている。その上父母に子育てとは直接関係ない他のトラブルや、過去の心的外傷を今でも過去のこととして整理できていなく、乗り越えることができていないといった問題が重なってくると子育て混乱はひどくなり、虐待など子供に心的外傷を与えるようになる。このような状態にある乳幼児の心的外傷に対しては、早期発見、早期治療が大切である。

今回産婦人科病院、保育園、乳児園でチェックリストを使用し、リスク事例をキャッチし、一次介入を乳幼児精神保健学の専門家の指導の下で現場の職員が行い、二次介入を現場で、現場の職員の協力の下で専門家が行った。また乳幼児の心的外傷の治療にはアタ

achment療法が非常に有効だった。

産婦人科病院では妊婦で過去、現在の解決できていない心的外傷を助産婦が母に質問し、チェックリストでキャッチし、また助産婦から見たリスク妊婦をチェックリストでキャッチし、一次介入、二次介入をした。妊婦 84 名中一次介入 11 例、内二次介入 3 例だった。

保育園において気になる親子について、幼児の心的外傷の表現である心身症、異常行動をチェックリストでキャッチし、気になる父母像を保育士がチェックリストでキャッチする。これらの結果を統合して検討をし、リスク親子に一次介入した。保育園児 116 名中一次介入のみで 18 例だった。児の心的外傷の治療は園で保育士が、自宅で父母がアタachment療法を行った。

乳児園では児退園後の父母の育児混乱を予防するため、気になる父母像を保育士がチェックリストでキャッチした。一次介入 10 例、二次介入 1 例だった。児の心的外傷に対しては園で保育士がアタachment療法を行った。

チェックリストはリスク事例発見に非常に有効だと思われる。しかし使用する助産婦、保育士は、乳幼児精神保健のスーパーバイザーの下で、乳幼児精神保健の知識を十分に身に付け、チェックリストの結果に操られることなく、自分の感覚を一番大切にし上手に利用すべきである。

リスク事例への対応は、その事例に合ったそれぞれ違った介入をすべきで、集団での対応では本格的育児混乱の解決にはならない。